

「真の強さを求めて」

沖縄県立球陽高等学校 三年

知花 かおり

「敵の子供を助けてきたお前は卑怯者だ。弱虫だ」

これは、先日ある番組で取り上げられていた映像の中で、米軍人のイーサン・マコード氏に、同じ米軍の同僚から発せられた言葉です。

イラク戦争当時、イラクのバクダッド上空で、米軍のヘリコプターが、路上のイラク人記者が担いでいたカメラを武器である小型銃だと誤想して発砲した事件がありました。数分後、偶然民間人のワゴン車を通り、負傷者の救護を始めましたが、米軍は救助をする人々にも攻撃を浴びせました。その際、車に乗っていた子供二人も傷を負いました。すると米軍陸上部隊の一人が、その子を射爆範囲内から庇護するために、抱きかかえて自分の領地である米軍基地へ連れて帰ったのです。その人物がイーサン・マコード氏です。

しかし、攻撃を行った米軍側視点から見れば、危険因子である敵の子供を救助しようと基地へ連れて帰った彼の行為は許容できるものではなく、同士からは冒頭のような卑劣な言葉を投げられ、最終的に彼は米軍を追放されてしまう結果になりました。

卑怯者で弱虫というレッテルを貼られて軍を追放された彼ですが、実際にその映像を見た私の目に、彼は卑怯者にも弱虫にも映りませんでした。

敵の子供を助ける行為は「弱さ」で、民間人にも銃を向けることが「強さ」なのででしょうか。弱いことは悪で、強いことこそが善なのでしょうか。武器を携えた人間は強くて、無抵抗な人間は弱いのでしょうか。

「戦争は悪い、人を傷つけてはいけない」

そう教えられて生きてきた私の目には、誰彼かまわず殺傷する行為よりも、敵と言う名を持つが、争いには無関係の幼子を助けた彼の姿が強者に映りました。彼の行動を「弱さ」と呼ぶならば、私はその「弱さ」を果敢な行動として称賛したいと思います。

このように、真の強さの意義について考えていた時、私の住む読谷村で「県民大会」が行われました。沖縄の普天間基地を県外へ移設する事を求めるために、一つの場所に九万人以上の沖縄県民が集結し、基地移設を訴えました。近年は基地の存在が引き金となって、県民を巻き込んだ様々な事件が起こっていることもあり、会場は、当たり前前に享受できるはずの平和な生活を求める県民の声で溢れていました。

この大会では、未来を担う子供達のため、あるいは生まれ故郷を守るためなど、個々で理由は異なるけれど、普天間基地県外移設という目的に向かって県民が戦っています。この県民大会も

イラク戦争も、人間が一つの目的のために戦っていることに違いはありません。しかし、二つの戦いに、決定的な相違点が存在します。それは「武器の使用」の有無です。身体も精神も夢も歴史も破壊してしまう武器は、決して強さの象徴とは思いません。戦争では強力な殺傷能力を有する武器を所持し、その武器こそが「真の強さ」を隠し、無意味な破壊力を身に付けてしまうのではないのでしょうか。

正義は平和のためというならば、正義のための戦争は善なのでしょいか、悪なのでしょいか。必ずしも勝者だけが正義とは限らず、敗者が悪とも限らないこの世の中で何が「真の強さ」でしょうか。沖縄県民一人一人の声はいくら集結しても依然として弱いままなのでしょいか。

その答えは身近なところで見つけることができました。

毎年六月になると礎の前で静かに祈る老人がいます。彼らは、しわの刻まれた震える手を合わせて祈ります。自然に流れる涙だけで苦難の過去を語り、小さな声で平和を願います。権力も力も武器もなく、しかし人々の心に熱く届く祈り。これが本来の強さだと彼らのひたむきに祈る姿から教わかりました。「真の強さ」とは弱さを隠蔽するものではなく、自身を覆う権力も武器も捨てて、何も恐れずに自分の弱さをさらけ出すことです。

同じ時代を生きていても、戦争を知らない私達と平和を知らない紛争地帯の子供達の価値観は違い、求めるものも異なります。また歴史の上では、頂点に立つ者が善悪の価値を塗り替えてきました。

しかし、戦争の傷の残る沖縄に、今、生きている私達こそが自らの弱さを見つめ、「真の強さ」を求め、担い、次世代へ繋いでいくべきだと思います。